

学会参加報告

国文教授 土屋博映

<国語学会2003年度春季大会>

5月17日(土) 公開講演会 堺市市民会館

5月18日(日) 研究発表会 大阪女子大学

5月17日の公開講演会は『日本語史研究の将来—理論と実証との接点—』が主題だった。<発題>が「言語理論と日本語史研究」で、金水大阪大大学院教授、渋谷大阪大大学院助教授、前田奈良教育大助教授の3名、<討議>が「私の日本語史研究の立場」で、高山福井大助教授、安部学習院大教授、高山九州大大学院助教授の3名、以上6名により、今までの国語学の研究のあり方を反省し、これからの研究の方向性を示唆した有意義なシンポジウムであった。

5月18日の研究発表会は、A・B・Cの3会場ならびにポスター発表会のデモンストレーションに分かれておこなわれた。私はB会場を中心に出席した。橋本(大阪大大学院)の「外来語に現れるファ行子音の音声変異」、福田(神戸市外大)の「現代日本語のテンポラリティと情報時」、高宮(大阪大大学院)の「不定詞を用いる間接疑問文の形成過程に関する一考察」、小川(大阪大大学院)の「カラニの一用法」の4氏の発表を聴講した。「カラニ」変遷を追及した小川の発表にもっとも興味をひかれた。

特別研究助成による研究成果の概要

国文教授 土屋博映

2002年度、「特別研究による研究助成による研究」として、私は『徒然草』を研究・調査した。

目標の第一は『徒然草』本文の研究であり、第二は作者ト部兼好の人物像の研究である。

本文の研究について、参考資料として、購入した主なものは次のとおりである。

『徒然草解釈大成』(岩崎書店) 『徒然草の研究』(自治日報社) 『徒然草全注釈上下』(角川書店) 『徒然草諸注集成』(右文書院) 『徒然草諸抄大成』(立命館大学) 『徒然草総索引』(至文堂) 『徒然草』(写真複製版・国会図書館蔵) 『徒然草』(写真複製版・静嘉堂文庫蔵)

使用した機関の主なものは次のとおりである。

国立国会図書館・京都大学附属図書館・京都大学文学部図書館・龍谷大学図書館・京都女子

大学図書館・金沢文庫

作者について、住居や関連する寺社、地域などを調査した主な場所は次のとおりである。
仁和寺・双が岡・上鴨神社・下鴨神社・烏辺野・静閑寺・岩清水八幡宮・小野庄・称名寺

以上の資料や調査をもとに、『徒然草』という作品を人物像を含め、総合的に明らかにしようというのが本研究の狙いであり、その方向で研究を継続している。

『徒然草』は大変有名な作品であるが、実はその作品の解釈という基本的なところでも幾多の説が存在し、一般に知られている作品像については、かなり問題点を多く含んでいる。つまり虚像が世の中にまかりとおっているといてもよいくらいなのである。

また人物像については本文以上にあいまいである。兼好は作品の中でも自己を語りたがらない上に、伝記といったものが断片的以下ほどにしか存在しない。人物像について新発見があるなどという偶然性などとても期待するわけにはいかない。要するに兼好像についても本文以上に虚像がまかりとおっているわけなのである。

そこで私は原点にかえて、先入観に毒されないように、まず素直に『徒然草』本文の解釈をおこなっていくことにした。参考資料としては前記『徒然草解釈大成』によることにしている。また、その基本精神の原点になる資料として、『徒然草抜書』（講談社刊・小松英雄著）をとりあげた。著者の小松英雄の研究姿勢を受けて、序段から解釈を継続している。

また、人物像については、資料の真偽を十分に勘案しつつ、知らぬ間に増幅されてしまった、ト部兼好像を、本来の姿に戻したいと考えている。その結果、今までの兼好像の大部分が崩壊すると想定しているが、それはやむをえないことである。

『徒然草』に限らず、文学作品や作者像は一人歩きをはじめたものであり、一般的にそういうあり方が存在してもかまわないが、真実の姿はここまでだ、という、学者としてのラインをひいてみたい。

私の想定では『徒然草』は多分に過大評価されている傾向にあると思う。それを正しいあり方にするために、作品の誠実な解釈と虚偽の人物像を除く研究を日々淡々と続けているところである。